

わが

人と自然が織りなす しあわせ交流都市を目指して

小さくとも
きらりと光るまち

平成16年4月1日、小県郡東部町と北佐久郡北御牧村が合併し当時、長野県下18番目の市として「東御市」が誕生しました。

県の東部に位置し、北は上信越高原国立公園の浅間連山を背に、南は蓼科、八ヶ岳連峰の山並みに囲まれ、市の中心を分けるように千曲川(信濃川)と鹿曲川が流れ、旧北国街道の宿場町であり今もなお江戸時代の面影を残す「海野宿」など、豊かな自然、歴史、文化が調和した美しいまちです。

そんな豊かな風土に恵まれた本市は、農業を基幹産業とし、巨峰、白土馬鈴薯、スイートコーン、日本一の生産量を誇るくるみなどが栽培されています。

また、圧倒的な勝負強さを誇り大相撲史上最強とも評された江戸時代の名力士「雷電為右衛門」の出身地としても著名です。

小学校区単位のまちづくり

市内には小学校を単位に5つの地区があります。育ってきた環境、歴史や文化、そこで培われてきた風習やお祭りなど、それぞれが特色を持ち今に受け継がれています。そのため、まずは自分たちの将来や学び育った小学校区のありようで、地域づくり、子どもたちの育ちを考えていただくことが必要であると思っております。本市では、地域が直面している課題の解決や地域の将来の在り方のための取り組みなど、自らが考えて実践、地域の良さを再発見し共有する、そういった事業の応援を推進しているところです。

新たな挑戦 ワインを キーワードに「東御市創生」

昼と夜との気温差が大きく、日本全国の中でもトップクラスの日照量を誇る東御市。年間降水量も少なく、これらの条件を最大限に生かして、近年特にワイン用ぶどうの産地としての産業の育成に力を入れています。平成20年には、当時長野県内初のワイン特区として認定され、現在では5つのワイナリーが「東御ワイン」を広めて活躍しております。

本年5月に、近隣の8市町村と連携し内閣府に「千曲川ワインバレー特区」を申請、6月には無事認定となりました。こうしたワイン振興に対する取り組みが徐々に根付いており、かつて桑畑だった、水利などの条件が悪く荒廃し

ていた農地の多くが、ワイン用ぶどう畑へと生まれ変わりつつあります。

多くの方に本市を訪れていただくよう、先人たちが紡いできた歴史や風土を守り育てつつ、ワイン振興などの新たな分野にも挑戦し続けております。こうした取り組みが再び訪れたいと思える契機となり、市外から訪れる方だけでなく、そこで暮らす住民にとっても誇りに思える心が育ってきております。ワインをキーワードとし



市内に広がるワイン用ぶどう畑

「東御市創生」が着々と胎動し始めております。

標高差など地域の特性を生かした将来構想 (高地トレッキング構想)

上信越自動車道東部湯の丸ICから、車で25分ほど走ったところから、本市が誇る観光拠点の一つ「湯の丸高原」があります。夏はコマクサなどの高山植物の宝庫となり散策やトレッキング、冬はスキーやスノーボードなどウィンタースポーツを楽しみに、多くの方が訪れています。毎年6月下旬には、70万株ともいわれる国の天然記念物にも指定されているレンゲツツジ群落



高山植物の宝庫として知られる「湯の丸高原」

が山一杯に広がりを見せ、まるで朱色の絨毯を敷き詰めたようだと観光客の目を喜ばせています。

湯の丸高原は、標高1700mから上に位置しているため、低酸素運動が可能であること、また最寄りのインターチェンジからもわずかな時間で移動できるなどの利点から、近年はスポーツ合宿や大学のクラブ活動でも、多くの団体の皆さまにご利用いただいております。特に真夏の日中でも平均気温が20度前後と、快適に運動ができることもメリットです。

日本水泳連盟は本年7月、「湯の丸高原に競技用長水路プール施設を整備し、日本水泳界における高地トレッキングの拠点とするべきだ」と表明されました。また、「現時点では低酸素のトレッキング施設が国内になく、時間や費用をかけて海外遠征を行わなければなりません、湯の丸高原に施設が整備されることで、よりメダル獲得が期待できる」とも言及されています。

首都圏から新幹線、高速道路でも移動可能な交通アクセスの利便性、時間と費用の圧縮が、次のメダリスト候補の育成につながると俄

然注目を集めています。2020年東京五輪・パラリンピック開催に向けて、湯の丸から「センターポールに日の丸を！」をスローガンに、本市からメダリストが輩出されることを夢に描きながら、誘致活動に取り組んでおります。

おわりに

平成26年で本市誕生からちょうど10年が経過しました。10年を迎えるに当たり平成26年3月に「第2次東御市総合計画」を策定し、次

の10年のまちづくりの指針となる将来像として「人と自然が織りなす しあわせ交流都市 とうみ」を掲げました。一つの課題に対し住民と行政が一緒になって汗をかき解決のための労苦を惜しまない、そんな真の協働を推進し、住民一人一人が自分の故郷や地域の歴史に誇りを持ち、しあわせな気持ちで心豊かに過ごすことのできるまちを目指し、いかなる課題に対しても「突破」する気概で、日々まちづくりに取り組んでまいります。

プロフィール

- ◆ 面積 112・37km²
- ◆ 人口 3万823人
- ◆ 世帯数 1万1777世帯

〔将来都市像〕人と自然が織りなすしあわせ交流都市 とうみ

〔まちの特徴〕年間を通じて少雨で日照量も多く、太陽がさんさんと輝くまち
〔市町村合併〕平成16年4月1日 小



東御市長
花岡利夫



県郡東部町、北佐久郡北御牧村の対等合併により新設
〔特産品〕巨峰、白土馬鈴薯、スイートコーン、くるみ、ワイン
〔観光〕海野宿、湯の丸高原、芸術むら公園
〔イベント〕巨峰の王国まつり、湯の丸高原つつじまつり、火のアートフェスティバル、海野宿ふれあい祭

※ 面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

活力に満ちた うるおいとやすらぎのまち

はじめに

つくばみらい市は、緑と水の豊かな自然に恵まれた環境にあり、都心からの交通アクセスをより短縮する常磐自動車道谷和原ICや、秋葉原とを40分で結ぶつくばエクスプレスにより、首都近郊都市として急速に発展を続けています。

また、市内には首都近郊で、時代劇のロケができる施設「ワーブステーション江戸」をはじめ、茨城百景に名を連ねる「福岡堰の桜並木」、問宮海峡を発見した偉大な探検家・測量家「問宮林蔵」の生家や記念館など、多くの観光名所があります。

加えて本市の自慢を申し上げますと、東洋経済新報社にて毎年全国各地791都市の公的な統計データを調査し、独自の指標によりランキ

ング化した都市データによると、本市の「成長力ランキング」が、本年全国第1位となりました。この「成長力」は人口や世帯数、事業所数、工業生産、住宅着工、所得・税収、個人消費や産業関連などの伸び率をそれぞれ指数化し、ランキング化したものです。

つくばみらい市の見どころ

『綱火』

戦国時代末期から伝承されてきた詩情あふれる伝統行事であり、空中に綱を張り巡らし、縄を使って人形や船などを操り人形芝居を演じます。

太鼓や笛のお囃子はやしに合わせて人形が動きながら縄を伝い、仕掛け花火が数々の演出を添えます。本市には、国指定重要無形民俗文化財に指定された2つの流派があ

り、それぞれ見所も異なります。

『小張松下流綱火』

10m程の大柱3本を建て、3本の大綱と数本の小綱を張り巡らし、やぐらの上から、空中で人形芝居を演じます。

仕掛け花火と人形が夜空に浮き



やぐらの上から、綱を操り空中で人形芝居を演じる「小張松下流綱火」

出る様子は、まさに歴史と伝統を感じさせる貴重な文化財です。

『高岡流綱火』

今にも神社が燃えんばかりに、手製の花火で辺り一面、火の海となる「くりこみ」で始まるのが高岡流綱火であり、その迫力は見応えがあります。

大樹から舞い降りた赤と黒のクモが巣をつくるのを見て暗示を受けた村人が編み出したと伝えられています。



手製の花火から吹き出す火の粉で神社を清める「高岡流綱火」

『間宮林蔵』

間宮林蔵は間宮海峡を発見した人物として、世界的に有名になったことは誰もが知るところです。その後は、蝦夷地をくまなく測量し「伊能図」の蝦夷地部分は間宮林蔵によって完成したとの報道もされたところです。

本市では、安永9年にこの地で生まれ育った「間宮林蔵」を紹介するために、顕彰事業の一つとして「間宮林蔵記念館」を建設しました。館内の展示は間宮林蔵に関係するものおよび彼の生きた時代背景などで構成され、時代に沿った紹介をしています。全国各地から収集した数少ない貴重な資料のほか、現子孫宅に伝わる遺品などを、テーマごとに分かりやすく展示しています。

住んで良かった、住み続けたいまちづくりに向けて

本市は、県内区間全線開通に向け進められている首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の内側に位置します。今後は、さらに交通の利便性が高くなっていくことから、企業などから工業用地の問い合わせも多い状況にあります。

本市ではそれらを踏まえ、住んで良かった、住み続けたいまちづくりに向けて「地域経済の発展と雇用促進」を図るため、企業誘致を積極的に進めるための新たな受け皿づくりとして、市北部の福岡地区において、平成26年度から約32haの工業用地の整備を進めています。

この事業の事業手法については、民間の技術力や資金調達力を生かした「業務代行方式」を取っております。

本年4月には地権者による「福岡地区土地区画整理組合設立準備会」が発足しました。

本年度下半期には、組合設立準備会と市が協力して、土地区画整理事業の業務を代行する「民間事業者の募集及び選定」を実施するとともに、都市計画の変更手続きに入る予定です。

本市では市長直轄組織として「福岡地区整備推進室」を設置し、この事業を積極的に進めるための組織体制強化を図っており、今後も市が主導的な役割を果たしながら、地権者や民間事業者と緊密に連携・協力し、事業に取り組んでいきます。

また、本市のほぼ中央を通る常磐自動車道にスマートICを設置するための検討を進めています。スマートICを設置することにより、高速道路の利便性が飛躍的に向上し、福岡地区工業用地への企業誘致や市内への定住促進など、本市のさらなる発展の起爆剤になるものと考えています。

おわりに

つくばエクスプレス開業以降みらい平を中心に都市化が進み、子育て世代を中心とした人口が順調

プロフィール

- ◆ 面積 79・16 km²
- ◆ 人口 4万9962人
- ◆ 世帯数 1万9147世帯

〔将来都市像〕みらい平を中心とした新しい都市、隣には美しい自然と歴史あふれるまち

〔まちの特徴〕平成18年3月、旧伊奈町と旧谷和原村が合併、来年3月市政施行10周年



つくばみらい市長
片庭正雄



〔特産品〕米、とまと、ぶどう、サラダほうれん草、みつば、黒大豆

〔観光〕網火、不動院（清安山不動院願成寺）、間宮林蔵記念館、結城三百石記念館

〔イベント〕福岡堰さくらまつり、網火、みらいフェスタ、つくばみらい市長杯アームレスリング大会

に増加し、にぎわいと活気が生まれています。

今後も増加が予想される子育て世代を含めた多くの方々が「住んで良かった」「住み続けたい」と思っていたただける「まちづくり」を行うことが、本市の責務と考えています。引き続き、本市の施策目標である「みらい」を担う子どもたちに誇れるまちづくりに向けて積極的に各種事業を進めてまいります。

※ 面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

ヒトが生きるにはココチよい 米原

時代を超えた交流のまち

米原市は、滋賀県東北部地域の中心に位置し、日本百名山の一つである伊吹山が雄大にそびえる水と緑に包まれた自然あふれるまちです。

古くは、伊吹山の神と戦った日本武尊が醒井の居醒の清水で傷を癒やしたという伝説をはじめ、豊臣秀吉が鷹狩りで立ち寄り、寺の小坊主だった石田三成を「三碗の才」で見出したことで名高い観音寺があるなど、歴史舞台にもたびたび登場し、多くの史跡が残されています。

市内には、「柏原宿」「醒井宿」「番場宿」の中山道3つの宿場と、北陸へ続く北国街道の宿場「米原宿」そして北国脇往還の「春照宿」「藤川宿」があり、古くから交通の

要衝として重要な役割を担ってきました。今も名神高速道路、北陸

自動車道、東海道新幹線、東海道本線、北陸本線、近江鉄道などの交通網が集中し、近畿、中京、北陸を結ぶ交通の結節点として、人、モノ、情報が行き交います。

地域での支え合い
— 地域お茶の間創造事業

本市では、平成12年ごろをピークとして人口減少が始まり、合併時に約4万2000人だった人口は、4万人を切っています。人口減少、少子化、高齢化による地域疲弊が進み、自治会事業や伝統行事の維持・運営継続が困難な状況が生じています。

このような中、人口減少という現実を受け止めつつも、本市ならではの豊かさを追求することで、

子どもから高齢者までが安心して暮らせるまちづくりに取り組んでいます。今回は、その取り組みの一つとして、地域を住民の手で支え合う「地域お茶の間創造事業」を紹介します。

この事業は、平成25年度から2年間のモデル事業として始めたもので、自治会を単位とした範囲で、自治会や任意団体、NPOなどが事業主体となり、高齢者をはじめとした居場所づくり事業と日常生活でのちよっとした困り事に対応する生活支援サービスを提供していたり、公募によって実施団体を採択し、年間60万円を補助するほか、市と市社会福祉協議会から職員を派遣し、団体設立や運営の支援に当たり、モデル期間の2年間で13団体がこの事業に取り組みまし

た。コミュニティカフェなどの居場所づくりはすべての団体で実施され、それ以外の生活支援や訪問型サービスは、見守りや通院・買い物支援、草刈りや除雪など地域の実情や住民ニーズに応じた活動を展開されています。

さらに、事業の実施により、居場所での高齢者の体調変化などの「気づき」から市と連携した支援が生まれ、最初はお客さんのように思っていた人が「自分もできる」と支える側にもなっているなど、住民の意識が変化し、地域振興の面でも効果が表れています。

このようにモデル事業の効果を踏まえ、本市では事業のメニューや団体設立のスキームなどを示したマニュアルを作成し、本年度から市内全域への拡大に向けて事業を展開しています。

地域支え合いセンター

平成26年の介護保険制度の改正により、介護予防サービスの一部



地域お茶の間創造事業によるお茶の間（居場所）の様子

が市町村事業である地域支援事業へ移行され、新しい総合事業として始まっています。本市では、この「新しい総合事業」を平成28年度から実施する予定です。

現在、事業の実施に向けて、住民などの多様な主体がサービスを実施できる体制づくりに取り組んでいるところであり、本年7月に「米原市地域支え合いセンター」を市民の支え合いの活動の拠点として設置しました。住民主体の団体の活動支援のほか、地域課題に

取り進む人材や組織の育成、解決に必要な広域的な支え合いの仕組みづくりなどを進めています。運営は、日ごろから市民の暮らし、地域に根ざした活動を支えている市社会福祉協議会に委託し、地域福祉のノウハウを生かしつつ、農業や商工業などの他分野の団体や企業を巻き込んだ取り組みを進めようとしています。

市と市社会福祉協議会が丸くなって、地域での支え合いの体制づくりを推し進めながら、市民の皆さんが安心して暮らせるまちづくりを着実に進めてまいります。

住みたいまち、住み続けたいまちを目指して

平成26年度から中学生までの医療費無料化を実施してきたところですが、本年度からは、保育所・幼稚園・認定こども園の第2子以降の保育料の無料化も始め、子育て世代の経済的負担軽減、出生率の向上と子育て世代の定住促進を図っています。若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえていくことで、若者の定住につなげてまいります。

また、利便性の高いまちである

という強みを生かし、東海道本線の駅周辺地域を移住定住のモデル地域に指定し、住宅の新築や購入への補助など移住定住者などの支援制度も始めています。人口減少という地域課題を共有する地元金融機関も支援制度に合わせ、駅周辺に住宅を建てる人などに優遇金利を適用する商品を発売されるなど米原創生が動き始めています。県下唯一の新幹線停車駅である

プロフィール

- ◆ 面積 250.39 km²
- ◆ 人口 3万9943人
- ◆ 世帯数 1万4042世帯

〔将来都市像〕自然きらめき ひと・まち とぎめく 交流のまち

〔まちの特徴〕伊吹山をはじめとする自然や、宿場や寺院など歴史文化の魅力あふれるまち

〔市町村合併〕平成17年2月14日、山東町、伊吹町、米原町が合併して米原市となる。平成17年10月1日、米原市と



米原市長
平尾道雄



近江町が合併して現在の米原市となる
〔特産品〕赤かぶ漬、木彫製品、サイボシ、近江真綿布団、伊吹そば、伊吹牛乳、伊吹ハム、ピワマス
〔観光〕伊吹山、三島池、霊仙山、天野川のゲンジボタル、地藏川の梅花藻、居醒の清水、奥伊吹スキー場
〔イベント〕天の川ほたるまつり、夢高原かつとび伊吹、梅花藻ライトアップ、雪合戦奥伊吹バトル&かまくら祭

米原駅周辺も変わりつつあり、交流拠点としての可能性がさらに広がっています。アクセスの良さと伊吹山をはじめとする魅力ある地域資源を最大限に生かし、米原市に生きるこの心地よさをさらに高めるとともに最大の魅力として広く発信していくことで、住みたいまち、住み続けたいまちとしての信頼と評価を高めてまいります。

※ 面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

エネルギーでこれからの未来を照らすまち くみやまスマートコミュニティの実現に向けて

はじめに

東に邪馬台国卑弥呼伝説を伝える女山、霊峰清水山を擁し、西を有明海に面するみやま市は、平成19年に山門郡瀬高町、山川町と三池郡高田町の三町が合併して発足した市です。

市の北部を清流矢部川が貫流し、山と海に囲まれたみやま市は、肥沃な土壌と豊かな水、温暖な気候に恵まれ昔から農業や漁業が盛んで、「みかん」や「なす」「セルリー(セロリ)」「高菜」「海苔」などは全国有数の産地となっています。

歴史のロマンあふれるまち

本市の女山地方には、古代卑弥呼の統治下にあったのではないかと推測される多くの古墳が点在し、数多くの遺跡が発掘されてお

り、この地が早くから文化的にも経済的にも開けた地域であったことがうかがえます。

また、本市には2つの貴重な文化財があります。1つは、700年の伝統文化であり、昭和51年に国の重要無形民俗文化財に指定された幸若舞です。幸若舞は、福井県越前町にその起源があり、室町時代に本地方に伝わり、その後大江の舞として農民によって継承され現存するのは、ここみやまのみとなっています。

2つ目は新開能(宝満神社奉納能楽)であり、昭和51年に福岡県から無形民俗文化財として指定されました。新開能は、享保元年(1716年)に当時の柳河藩主立花鑑任公が、祈願成就のため宝満神社に「能楽」を奉納したことに始まるといわれ、明治時代になると、



国指定重要無形民俗文化財の「幸若舞」

氏子の自主運営により、能楽師ではなく地元の人々が舞うようになり、現在まで受け継がれています。

みやまスマートコミュニティ 大規模HEMS(ヘムス) 情報基盤整備事業

低炭素な社会の実現、そして東

日本大震災における発電所事故などを背景に、分散型のエネルギー資源、とりわけ再生可能エネルギーの普及・確保がより求められるようになりました。

本市は平地が多く日射量や気温が太陽光発電に適した土地です。市内にメガソーラーが3基あるほか、市内約1万4000世帯のうち、約1000世帯が自宅屋根に太陽光発電を導入しています。市内で生産される太陽光エネルギーは、天気の良い日は、市内の昼間に使う電力を100%賄うことができます。このような好条件の中で、地域資源を生かしたまちづくりとエネルギーに対する意識のよりの一層の向上、快適な暮らしによる生活の質の向上につながる事業検証を目的とした経済産業省の「大規模HEMS情報基盤整備事業」に自治体として全国で唯一採択されました。現在約2000世帯の市民モニター様に協力をいただき、HEMS機器を設置して、電力利用データを収集・分析する



市内にあるメガソーラーの1つ「みやま高柳発電所」

一方で、楽しみながら安心してスマートライフを送れるよう、さまざまなサービスをを行っています。

【電気の見える化】自宅の電力消費量を時間ごとに見えるようにし、電気の使い方を工夫できるようにしています。

【高齢者見守り】電気の使い方から普段と異なった生活行動を見つけた場合、親族や協力者に連絡します。

【電気・ガス診断】電気とガスを組み合わせて最適な料金や省エネできる新型機械（エアコンや冷蔵庫）への変更を提案します。

日本初の自治体による 電力事業売買会社設立へ

前述の事業の推進と合わせて、

平成28年4月の電力小売り自由化を見据え、本年3月に市が55%を出資した日本初の自治体による電力売買事業会社を設立しました。自治体が主体となった新電力会社を設立することで、これまで電力会社に流出していた財が市内に還流するスキームを生み出し、エネルギーの地産地消はもとより雇用や地域経済の浮揚に寄与することができるとの考えから、新会社はHEMS事業により収集したビッグデータを基に、自治体ならではの住民サービスを展開してまいります。

例えば災害時の緊急連絡や不審者情報などの即時性のある情報を提供し、福祉の面でも高齢者の見守りだけではなく、児童の見守りや在宅医療との連携など、総合的な住環境サービスの向上で、市の人口減少の抑制、定住化促進につながる予定です。

バイオマス産業都市構想

さらに、太陽光以外の再生可能エネルギーの導入可能性についても調査・研究を平成24年度から3カ年掛けて行い、「バイオマス産業都市構想」を策定し、九州では

初めて国から認定されました。当構想の核である、生ごみ・し尿・浄化槽汚泥をエネルギー源とする「メタン発酵発電・液肥化プロセス」は、これまで焼却処理・水処理されていた生ごみなどを、メタン発酵により電気を生み出し、消化液は肥料として農業に生かすというものです。

このように地域資源を生かすことで、地域エネルギーと雇用を創

プロフィール

- ◆ 面積 105.21 km²
- ◆ 人口 3万9259人
- ◆ 世帯数 1万4155世帯

【将来都市像】人・水・緑が光り輝き夢くらむまち

【まちの特徴】山・川・有明海に接する肥沃な土地で農業・漁業が盛ん。700年の歴史を持つ幸若舞を見るこ

【市町村合併】平成19年1月29日 高町・山川町・高田町で三町合併



みやま市長
西原 親



【特産品】セルリー（セロリ）、なす、みかん、たけのこ、いちご、高菜漬、ジャム、花火、樟脳、きじ車

【観光】清水寺、長田の銀杏、濃施山公園、御牧山、道の駅みやま、座敷梅

【イベント】幸若舞、新開能、みやま納涼花火大会、清水山ロードレース大会、まるごとみやま秋穫祭、大人形・大提灯

出し、また市民サービスなどの向上や農業生産者の経費削減につながる循環型社会を推進しています。

未来に向けて

豊かな地域資源を生かした活力ある、安心して暮らせる「みやま市」、市民の皆さんがこのまちに住んで良かったと言っていただけ「みやま市」を築き上げるためこれからも、挑戦し続けます。

※ 面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。